



帰国前研修会

(財)自治体国際化協会業務部

帰国前研修会は、JETプログラムの二年目から五年目の契約期間を満了し、帰国を予定しているJET参加者のうち、希望者を対象に、元JET参加者やビジネスの分野で活躍している講師を招き、帰国する上での心構えや母国での就職情報、業界ごとの最新の情報等を提供することにより、契約団体での残りの契約期間を有意義に過ごせるように支援することを目的としています。

今年度は、平成二十一年三月九日から十一日までの三日間、横浜市のパシフィコ横浜にて、総務省、外務省および当協会の共催により開催し、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどの出身の三七二名の参加者がありました。

一日目（開会式・基調講演ほか）

一日目の開会式では、主催者を代表して外

務省と当協会からあいさつがあり、JETプログラムにおいて地域の国際化や語学指導に多大な貢献を果たしたことに對する感謝の言葉が寄せられるとともに、残された任期で充実したJET生活を過ごしてほしいとの言葉がありました。引き続き、在日英国商工会議所のエグゼクティブ・ディレクターであるOBEイアン・デ・ステインズから「新しい時代のための新しい思考」と題した基調講演がありました。ステインズ氏からは、現下の厳しい経済情勢について悲観ばかりせず、景気回復後を見据えて、しっかりとスキルを積み必要があると助言がありました。また自身の多彩な経験談を披露され、参加者たちの零囲気を盛り上げていきました。JET参加者にとって今後のキャリアを考える上で、大変刺激になったと思われます。続いて、当協会のプログラム・コーディネーターであるステイブ・ウォーカーとサシャ・バトリックから、「職場に良い印象を残すた

めに」と題して講演を行い、帰国に向けて準備をするとともに、契約団体と良好な関係を保ち、良い印象を残した上で契約期間を満了するようにアドバイスを行いました。



↑インフォメーション・フェア会場



↑通訳に関する分科会

その後、麗澤大学のアダム・コミサロフ氏より、逆カルチャーショックをテーマに講演していただきました。帰国後の適応については、現時点では想定しにくいことですが、誰しも経験する可能性があることを注意喚起するとともに、対処方法について有益な情報を提供しました。

最後に、北米地域とイギリス・オーストラリア・ニュージーランド地域の二つの会場に分かれて、就職活動時に必要な実用的な履歴書の書き方と面接テクニックについて分科会が行われました。JETプログラムで得た経験を今後のキャリアに生かすためには、どのように自分をアピールすればよいか事例を挙げて説明がありました。JET参加者に

とっては、この分科会は、JETプログラムと今後の自らのキャリアとのつながりを確認する場になったようです。

二日目(各種分科会・カウンセリング)

二日目には、申込時に寄せられた参加者の関心事項に基づき、様々なビジネス分野で活躍している講師を招いて、各業界の近況やその職業に就くために必要なスキル等についての分科会が行われました。各時間帯に四コマずつ、計二〇コマの分科会のうち、各自の興味・関心に応じて分科会を選んで参加しました。今年度は大学院進学、海外支援、初等中等教育、翻訳、NGO・NPO、国際援助、TESL・TEFL、日本語教育の分科会の人気が高く、主として外資系企業等の代表・役員クラスの方々である講師の皆様ですが、それぞれの体験に基づいて有益な情報を提供しました。進路についてまだ漠然としたイメージしか持っていないかた参加者も、専門分野の具体的な情報を聞くことよって、イメージをより明確にすることができた様子でした。

ビジネス分野別の分科会に続いて、各国在日大使館から外交官を招いて国別のプレゼンテーションが行われ、現在の母国の状況や税関関連情報および公務員への応募方法等の実務的な説明が行われました。

また二日目は、JETプログラムの参加者

有志によって組織されている自主的な親睦団体であるAJETおよび当協会により、分科会と並行して別会場においてインフォメーション・フェアを開催し、キャリア・アップのための教育機関等の資料やJETAA(JETプログラム経験者の自主的な親睦団体として組織された同窓会)各支部の情報を提供する場を設けました。民間企業や大学などの教育機関のブースを設置し、参加者に情報提供を行いました。特に今年は、世界的な不況の影響もあり、大学などの教育機関のブースの人气が高いうでした。

さらには、例年参加者から好評を得ているキャリア・個別カウンセリングを、講師を三名増員し計九名の講師の協力を得て二日目に実施しました。前日に履歴書の書き方と面接の分科会にて講演していただいたウィンス・リッチ氏の他、東海大学教育研究所のピーター・コリンズ氏、アメリカンエクスペンス・インターナショナルのイェジ・ジョン・シプリー氏、ユリカのアン・グッド氏、アメリカから招いたワイルド・エコノミック・フォーラムのアン・コラー氏、イギリスから招いた三菱地所現地法人のジェシカ・スミス氏、オーストラリアから招いた日本語教師のアン・ドリュー・チェリーニ氏、リンクメディアのテリー・ロイド氏そして東洋大学経済学部のステイブ・グリーン氏の協力で、講演では触れられなかった事柄や、それぞれのJET参加者が特に興味のあることなどについて参加者の個別相談に応じました。それぞれの



↑ 国別ビジネスパネルディスカッション

参加者の聞きたい内容に応じてアドバイスを
受けられるため、参加者の評価も高く、そ
れぞれ積極的に質問をしていました。

三日目（パネルディスカッション）

三日目には、国別での元JET参加者による
パネルディスカッションとビジネスパネ
ルディスカッションが行われました。

元JET参加者によるパネルディスカッシ

ョンでは、海外から招いた講師が進行役とな
って、母国の最新就職事情やJETプログラ
ムでの経験を生かした就職活動および逆カ
ルチャーシヨック等の体験について話してい
ただきました。各講師ともに母国においてJ
ETAAの役員として活躍しており、帰国後
のJETAAからの支援についての情報も併
せて提供することができ大変有意義でした。
それぞれの経験について話した後、質疑応
答の時間が設けられました。帰国後の生活
や就職など、現役のJET参加者が不安に
思っていることについての丁寧なアドバイ
スが得られ、活発な質疑応答が行われました。

国別のビジネスパネルディスカッションで
も、様々なビジネス分野からの講師が、自ら
のキャリアや業界についての話をを行った後、
質疑応答が行われました。講師からはそれ
ぞれの業界の専門的見地から、参加者に対
し的確なアドバイスが行われていました。

また、帰国前研修会に参加した十五カ国
すべての参加者に対し情報提供を行うべく、
昨年度に引き続き「その他の国」のパネル
ディスカッションを設け、南アフリカ、ジャ
マイカ、フランス出身のパネリストによる質
疑応答の機会を設けました。

帰国前研修会はJETプログラムの他の研
修会とは異なり、希望者のみが参加する任
意のものであるため旅費・宿泊費ともに自
己負担です。そのため多くの参加者が強い
動機づけを持ち、研修会に大きな期待を持
って参加しています。我々主催者としても、



↑ 分科会で真剣に話を聞く参加者

その期待に応えるべく今後も参加者の要望
や今回の反省点等を踏まえ、より良い研修
会にしたいと考えています。この研修会に参
加することによって、JET参加者がプログ
ラム終了後に対する不安を少しでも解消し、
日本での生活を最後まで充実させて過ごす
ことを願ってやみません。

また帰国後も、JET参加者が日本での
経験を生かして様々な分野で活躍すること
を、そして末永く日本と諸外国との架け橋
となっていくことを併せて祈ります。

JET の広場

The Japan Exchange and Teaching Programme

変化

鳥取県スポーツセンター スポーツ国際交流員

Ryan Williams

ライアン ウィリアムス

私はスポーツ国際交流員（SEA）として陸上ホッケーのコーチをするために鳥取県に来ました。自分の好きなことを職業としてできる常勤の仕事を見つけることができ、非常にラッキーだと思います。六歳のときからホッケーをやっている私は、バランスのとれた人を作るというスポーツの大事な役割を信じています。スポーツというのは、目標設定、集中力、忍耐力、義務等を教えてくれます。来日したときは、チームに成功を収めてほしいこともありますが、それ以上に自分がホッケーから習ったその価値観や理想を日本のチームに伝えたかったです。

私の一番目の誤りは、情報は一方向けに流れるという考え方でした。私はコーチをし、「国際化」を目指すために日本にきたので、オーストラリアでの生活、ホッケーのやり方、目標に向かって努力する方法等を選択に教えることだけが仕事だと思い込んでいたのです。もちろん私自身、何も知識を得ないと思っていたわけではありませんが、日本に来たことで最も利益を得たのは選手たちよりも私の方だったんだと気づいたとき、彼らからたくさん学んでいたことに驚きをかくせませんでした。

しかし、初めはそんなことを思っていないませんでした。日本に来たときは母国から飛行機で九時間離れた国ではなく、他の惑星に暮らしているような気がしたほ

どカルチャーショックを受けました。来日してから看板等は読めないし、駅でのアナウンスはわけが分からないし、コーヒーマ注文できないので、全てのものが違う気がしました。食べ物を見た目、味、においも違います。実は、最初の数ヶ月間は「違う、違う、違う」その言葉が私の中で何回も繰り返されたものでした。

その「違い」を一番具体的に表現したのは高校ホッケーチームでした。トレーニングの厳しさが特にショックでした。あまり休まずに毎日少なくとも二時間練習し、週末や休日にはさらに一生懸命でした。車をまだ運転できないこの少年達はまだでプロのようにトレーニングしていました。違う、違う、違うと感じました。

第二番目の誤りは、「違う」ことは「間違った」ことだと考えたことでした。日本と母国のトレーニング方法が異なっているから、ここでどうやってトレーニングをするのか、いつトレーニングをするのか、どんなに厳しくトレーニングをするのか、トレーニングをするときにどのようなことをするのか等、トレーニングシステムを全部改革しなかったのです。最初からやり直し、「正しい」方法でやりたかったのです。今から振り返ってみると、その考え方の狭さにびっくりします。

結果的には、自分の限られた日本語能力が助けてくれました。簡単な会話でもできなかったので、コーチと選手たちの

トレーニング方法が間違っていることを説明できませんでしたが、結局、説明できなくて良かったと思います。見知らぬ外国人が「正しい方法」を指図するのは日本人にとって非常に失礼なことだとは分かるからです。要するに、まだ始めてもない内に日本に来たときに掲げた目標を達成するせっかくのチャンスをふいにしてしまうことになったでしょう。

日本は私の人生についての教訓を与えてくれました。日本での違いが本場に「間違っている」のか、それともただ「違っている」のかをうまく判断できるようなりました。コーチを続けながら、改善の余地のあるトレーニング方法を徐々に変革させることができました。例えば、選手はトレーニングをしながら水をほとんど飲まなかったのです。トレーニングのときに休憩時間を入れて、日本語で「飲んでください」と言って、選手全員が飲むまでトレーニングを始めませんでした。水を飲みなさいと何度も繰り返し返すの



↑川沿にて

はたぶん選手達が嫌がると思います。が、やはり水に対する態度と活動は少しずつ変わってきました。私はそのよ



↑指導中

うな変革を試みながら、日本のスポーツに対するアプローチにますます感銘を受けるようになりました。選手がトレーニングをアプローチしたことはこれまで見たことがありませんでした。あるスキルがうまくできなかつたら、上手にできるまで一生懸命練習しました。トレーニングのときに短時間目を離しても、私が見ているときと同じようにトレーニングを続けました。オーストラリアでもこのようなトレーニングに対する熱意があつたらいいなと思い始めたのです。一五歳と一六歳の男子をトレーニング自由ということで残らせたとき、彼らが怠けずに一生懸命練習を続けられたらいいなと望んでいます。

日本の文化にはまったく分からないこともありますが、母国の物の見方と考え方をすっかり変えることをたくさん学びました。スポーツだけではなく、オーストラリアの文化と日本の文化の長所及び短所について考え、私と選手が相互に学び合っているように私達の国同士が互いに学びあつたらどうかと思います。例

えば、日本の学校で生徒が受けるプレッシャーが厳しくなかつたらいいなと思いますが、オーストラリアの子供には目的のはっきりした良いしつけをしてほしいです。日本にあるような豊かな文化がオーストラリアにもあつたらいいなと思ひながら、刻々と変化している現在のオーストラリアの表情が大好きです。

初めて日本に来たときは、選手を指導して自分の知識を伝えたいと考えていました。しかし時間がたち私の方が選手達から学んだことが多かつたということが分かつてきました。選手と日本が私の生涯に影響を与えてくれたように、私も彼らに何らかの影響を与えたいと思います。



Ryan Williams

オーストラリア・ブリスベン州出身。2006年に鳥取県に来県。陸上ホッケー選手歴26年。その間に国と州の代表に選ばれ、英国ではプロの選手となる。JETプログラムでは10人しかいないスポーツ国際交流員の1人。好きな日本料理はカツどん。

特別な場所



岐阜県八百津町役場地域産業課国際交流員
Estie Shenderovich
エスティ シェンデロビチ

岐阜県の緑に溢れた山の中に八百津という町が位置しています。栗きんとんの和菓子や八百津せんべいで知られている八百津町には他の日本の市町村にないものが存在します。それは、イスラエル人の国際交流員です。

八百津町がJETプログラム唯一のイスラエル人の派遣先である理由が、八百津に生まれた偉大な人物の物語にあります。この地域と遠くにある小さな国を結びつけるのは杉原千畝という人物です。八百津出身の外交官であった彼は第二次大戦の時リトアニアのカウナスで理事代理として勤めていました。一九四〇年の夏にナチスドイツの迫害から逃亡してきたヨーロッパのユダヤ人に日本通過ビザを発行して六〇〇〇人ぐらいの命を救いました。その人道的行いを当時ナチスドイツと同盟関係にあった日本政府の命令に反し、自分のキャリアと家族の安全を危険にさらしながら行いました。戦後帰国して外務省から退職した杉原氏は一九六八年に彼のおかげで救われたユダヤ人の一人に見つけられました。イスラエル政府は彼の勇敢な行いを認め、彼に「諸国民の中の正義の人」という称号を与えました。ホロコーストの時ユダヤ人を救った人に与えられているその名誉称号を受けた日本人は杉原千畝しかいません。

そのことを聞いて彼の故郷である八百津町の人々は彼の人生をたたえるために「人道の丘」という記念公園とそのなかにある

杉原千畝記念館を建設しました。八百津町の国際交流員として私の仕事も杉原氏の記念館に関わっています。記念館が作られてから毎年イスラエルから数百人もの観光客が八百津を訪ねます。イスラエルや米国などに住んでいる、杉原氏のビザのおかげで救われた人やその家族の人が、八百津町と連絡を取り続けます。そうして、彼の行為の物語が現在日本の子供たちに教えられています。時々私は記念館を訪ねる小学生などの前でユダヤ人の歴史、ホロコースト以前のヨーロッパの生活、イスラエルやイスラエル人からみた杉原氏の行為について話をする機会を与えられます。小さい子供たちにホロコーストのような悲惨な現実を教



↑小学校でイスラエルを紹介

えるのはどこでも難しいですが、日本のように、数十年間平和を享受している、出来事から遠く離れている国では特に難しくなると考えています。

自分の国と文化を紹介する他の国際交流員と同じように町の学校を訪問し、地図と写真、ゲームとクイズを使ったり、時々伝統的な料理を作ったりしながらイスラエルの話をします。J.E.T.に参加する前に教育に関わっていなかった私は、この町の小学校が子供たちを様々な体験に触れさせるように頑張っていることにすごく感動しました。子供たちも新しい体験に興味を持つと思います。

八百津町に来てから、町民のなかには私の先任者やイスラエル人観光客との接触を通じてイスラエルのことに詳しくなった人が驚くほど多いと気が付きました。時々誰かにヘブライ語で「シャーロム」と挨拶され、イスラエルの状況に関して話かけられることがあります。J.E.Tプログラムの前



↑八百津町のプーリム カーニバル
仮装パレードで

に京都大学で研究生として二年間を過ごしましたが、それほどイスラエルのことを知っている人に会ったとは言えません。

ここにはイスラエルの言葉であるヘブライ語まで習いたい人がいました！現在二つのグループにヘブライ語を教えています。その中には聖書に興味があり、長い間ヘブライ語を勉強している人がいて、一緒にヘブライ語の練習として旧約聖書の物語を読んでいます。

国際交流員の仕事だけでなく、日本の地方の役場の仕事に関わる様々な行事を見たり参加したりすることができます。そのような機会は日本を訪ねる外国人や日本を研究する人でもあまり与えられていないと思います。私の課の同僚たちと一緒に稲刈りや植林、八百津の特産の販売を手伝うことができるともうれしかったです。このようにときに本当に地域社会の一部となったように感じます。自分がそんなに遠いところからここにきたことも忘れてしまいません。

最近イスラエルの祭り「プーリム」に基づいた国際的なイベントの実行に参加しました。「プーリム」というのはハロウィンみたいで、仮装やプレゼントのやりとりもある、子供たちにとっても楽しい祭りです。八百津町の人々はその日にイスラエルの音楽を流しながら街を仮装パレードするようになってきました。多くの人の協力のおかげで今年も子供たちに祭りの意味を

教えて、新しい体験を楽しんでもらえました。このユニークな町の古い通りを、キャラクターや動物の仮装をした子供たちを従えて歩くのはやはりいつまでも記憶に残ります。

初めて八百津町に来たとき、この町の特徴は自然の美しさであると考えました。緑の山々と川や滝に心を奪われました。しかし、町民のなかに住んだり、働いたりして、この町の特徴はその人々であるのではないだろうかと思えるようになっていきます。



Estie Shenderovich

昭和55年ロシアのサンクトペテルブルグ生まれ。1992年両親とイスラエルへ移民。学校を卒業し、2年間空軍で軍隊生活を経験。エルサレムのヘブライ大学で国際関係と東アジア学を勉強、2006年から2年間京都大学で国費研究生として留学。2008年帰国し、7月に修士課程修了。8月再来日、八百津町に到着。

Changes

I came to Tottori Prefecture to coach field hockey as a Sports Exchange Advisor (SEA). I feel extremely fortunate to have found a job that allows me to do something I love as a full-time job. Having played hockey since I was 6 years old, I really believe in the role of sport in developing a well rounded person. Sport teaches you many things including goal setting, concentration, perseverance, and commitment. When I arrived in Japan, while I wanted the team to achieve success, I also hoped to pass the values and ideals that I had learned from hockey onto my new Japanese team.

The first mistake I made was thinking that the flow of information would be a one way street. I was there to 'internationalise' and to coach so I thought I would simply teach them about life in Australia, how to play hockey, and how to work together towards their goals. It was not that I did not expect to learn anything, I just did not expect that the flow of learning would flow so strongly in the other direction that I would end up feeling as though it was me, and not the players, who had benefited most from my presence in Japan.

That was not how I felt at the start though. Japan was such a culture shock that I felt like I was living on another planet rather than a mere 9 hour flight from my home country. When you first arrive it feels as though absolutely everything is different because you cannot read the signs, understand announcements at the train

station, or even order a cup of coffee. The food looks different, tastes different, smells different. In fact, that word was repeated over and over in my first few months here – different, different, different.

For me, nowhere was this more apparent than with the high school hockey team. I was shocked by how much and how hard they trained. Every day for at least 2 hours, more on the weekends and holidays. They would have very few breaks during training and even fewer days off. They trained liked professionals and they were not even able to drive a car yet. Different, different, different.

The second mistake I made was thinking that different necessarily equals wrong. Training in Japan is not how it is done where I come from, so I wanted to jump right in and completely overhaul the training system – how they trained, when they trained, how hard they trained, what they did at training. I wanted to start from scratch and do it the way that was 'right'. Looking back now I am amazed at how narrow minded I was.

In the end I was saved by my lack of Japanese ability. Considering I was struggling to even hold a basic conversation, how was I going to be able to explain to the coach and the players why everything they were doing was so wrong? I am thankful that I was not able to do this as I realise now how it would have looked

A Special Place

In the green mountains of Gifu prefecture lies a little town called Yaotsu. It is famous for its chestnut sweets "*kurikinton*", and the Yaotsu *senbei* crackers, and it also has something none other town in Japan has – an Israeli CIR.

The reason for Yaotsu being the one and only placement for an Israeli JET lies in the amazing story of a great man who was born here, a story that connects this rural community and a small country far far away. That man is Chiune Sugihara, a Japanese diplomat who was born in Yaotsu, and during World War Two served as a consul in Kaunas, Lithuania. In the summer of 1940, he saved the lives of over 6,000 Jews by issuing them transfer visas through Japan, in order to escape the Nazi persecution. He did so in violation of a direct order from his government, at the time an ally of Nazi Germany, risking his career and the safety of his family. Upon returning to Japan after the war he was fired from the Foreign Ministry, and, many years later, located by one of his survivors. Sugihara was honored by the Israeli government for his courageous act, and became the only Japanese person to be granted the title of "Righteous among the Nations", awarded to people from all over the world who risked their lives to save Jews during the Holocaust.

The people of Yaotsu, Sugihara's hometown, have constructed

the "The Hill of Humanity" park and in it the "Chiune Sugihara Memorial Hall" to honor him. A lot of my work here is related to his memory. The memorial has put Yaotsu on the map of Israeli tourism in Japan, and hundreds of tourists visit it throughout the year. People who survived thanks to his visas and their families keep contact with the town from Israel, the US and other places in the world. Also, the story of Sugihara's act is now being taught to children all over Japan. Groups of elementary school students visit the Hill of Humanity, and I have the opportunity to supplement their learning by telling them more about the history of the Jewish people, their life in Europe prior to and during the Holocaust, about Israel and the way the Sugihara story is perceived by its people. Teaching a subject as difficult as the Holocaust to young children is complicated no matter where, but especially in a country like Japan, both geographically removed from the events and enjoying a very peaceful existence for the last few decades.

I have also been visiting the local elementary schools and teaching the kids about Israel, the way most CIRs introduce children to their country and culture – through maps and pictures, games and quizzes, and occasionally cooking and baking traditional foods. Having had no experience with teaching I am impressed with the effort schools in my town put into exposing the kids to different

Ryan Williams

to the Japanese, a foreigner coming in telling everybody what the 'right' way to do things was. I consider how I would have felt if the situation was reversed. In short, I would have blown my opportunity to achieve my goals for coming to Japan before I had even started.

And so from the very start Japan was teaching me lessons about life. I learned to analyse more carefully whether something was actually 'wrong' or simply 'different'. As I continued to coach, I started to make very small changes to those parts of training that I felt could be improved. For example, players would rarely stop to drink water during training. At training I would include rest breaks and would simply say 'Please drink' in Japanese. Training would not restart until I had seen every player drink. I am sure the players are tired of me telling them to drink water, but over time, bit by bit, their attitude and behaviour towards regular water drinking has changed.

As I gradually started to make changes, I began to discover more and more things about the Japanese approach to sport that really impressed me. The way the players approached training was something I had never seen before. If they could not perform a skill they would keep trying until they could. If I had to leave them on their own for a short period of time during training, they would continue to train as hard as if I was there. I found myself wishing that there was more dedicated training time back in Australia. I

wished I could leave a bunch of 15 and 16 year old boys to train on their own in Australia knowing that they would not all be standing around talking when I came back.

There are some things that I will never understand about the Japanese culture, but there are many things that I have come to learn here that will forever effect the way I look at things in my own country. And not just with sport, I find myself looking at the positive and negative features of my own culture and the Japanese culture and wondering what it would be like if each could learn a little from the other, the way the players and I have done and continue to do. For example, I wish that Japanese kids had less pressure put on them to succeed at school, but then I wish Australian kids were more disciplined and goal driven. I wish Australia had rich cultural traditions like Japan, but then I appreciate the fluid and ever changing face of modern Australia.

When I first arrived in Japan I expected only to teach the players and pass on my knowledge. Over time I have realised how much I have benefited from the flow of learning in the other direction and can only hope that I have the same sort of lifelong effect on some of the players as they, and their country, have had on me.

英語

Estie Shenderovich

experiences, and find the children to be very open to learning new things.

In general, I was pleasantly surprised to see how well educated a lot of the people in Yaotsu are about Israel, through the work of my predecessors and the contact with Israeli visitors. Every now and then someone would greet me "shalom" in Hebrew or starts a discussion on the situation in Israel while showing good understanding of the subject. Prior to joining the JET Programme I spent two years as a research student in Kyoto University, and I can not say I have met as many people who knew about Israel as in this rural town of 12,000 people.

Not less amazing is the fact that I have found here people interested in learning Hebrew, hardly one of the world's most spoken languages. Right now I teach Hebrew to two groups of students. Some of them have been studying for years with my predecessors, being interested in Hebrew for religious reasons, and we are now reading stories from the old testament together.

Other than my own work as a CIR I have gotten the unique opportunity to participate in and observe the work of a rural Japanese municipality, a side of life in Japan that most foreigners,

even Japan scholars are rarely exposed to. With my department I got to participate in harvesting rice and planting trees, selling our town's produce and so on, and I am very grateful for each and every experience. It is on such occasions that I feel most like a part of the community, and forget about the distances I had to cross to be here.

Recently I took part in organizing an international event based on the Israeli holiday of Purim. Purim festivities slightly resemble Halloween, and usually include a masquerade, present exchange and lots of noise and fun for the children. It has become a tradition in Yaotsu to have a parade in costumes through the town's streets with Israeli music playing and so on. Through the joint efforts of many people here, we were able to introduce to local children the meaning of the holiday and encourage them to try enjoying some new things. I am sure that the memory of walking the old streets of this unique little town followed by children dressed as different characters and animals will be one of those that stay with me forever.

When I first came here, it was the natural beauty of Yaotsu that made it special to me. I was excited about its green mountains, the river and the waterfalls, But having gotten to know the people here and worked among them, I tend to believe they are the ones that make it special.

英語